

文化・経済フォーラム滋賀



News Letter

第8号 (2020年12月)

2021年、文化・経済フォーラム滋賀は発足10周年を迎えます。会員の皆様のご支援と、代表幹事のリーダーシップのもとに発展してきたフォーラム。初代と第2代の代表幹事を務められ、発足当時からご尽力いただいております木村先生、石丸先生からメッセージをいただきました。

成安造形大学名誉教授 **木村 至宏**
(文化・経済フォーラム滋賀相談役)

美術史家 **石丸 正運**
(文化・経済フォーラム滋賀相談役)

本年は、日本を襲った未曾有の新型コロナウイルス感染によって、その影響のもとでの生活を余儀なくされてきました。

さて、平成23年(2011年)2月11日に、「文化・経済フォーラム滋賀」の設立総会が、琵琶湖上に浮かぶ観光船内で、163人の参加のもと開催されました。当日、記念講演として鷺田清一大阪大学総長(当時)が、「アートが一般社会の中でコミュニケーションを媒介するようになった」と話されたことが印象に残っています。

それから「文化・経済フォーラム滋賀」の活動が、10周年を迎えられることができましたことはうれしい限りです。当時発起人に参画させていただいた一人として、これほど意義深いことはありません。これもフォーラム会員さまの平素のご理解とご協力のお力添えによるものと感謝しております。

フォーラムは、ご承知のとおり滋賀県の恵まれた文化と経済が、さらに交流・連携することによって、それぞれのより振興と推進を目指すことを目的に設立されたものと思っています。

それ以降フォーラムでは、主要事業の一つとして、毎年「文化で滋賀を元気に!賞」を旗印に、県下、地域においてすぐれた活動で活躍されている団体・個人のみなさんが表彰されています。ちなみにいままで受賞された方は大賞10、文化賞44にのぼると聞き及んでいます。いずれの受賞の皆さんに改めて敬意を表したいと思います。

ところで、いのちを輝かせ、生命の豊かさなどを学ぶのは「文化力」と言われて久しいですが、いまだ社会において地域の活性化を考える重要な「キーワード」であると考えています。

今後も引き続き、フォーラム滋賀にご指導、ご協力をいただきますことをお願いいたします。

2009年8月3日にびわ湖ホールの一室で県内の文化人と経済人の交流を目論む機会を設立する実行委員会が開かれ、その後数回会合を重ねて、名も「文化・経済フォーラム滋賀」の名称のもと、2011年2月11日に琵琶湖上ビアンカ船内で「第1回文化・経済フォーラム滋賀」の総会が開催されて以来、10周年の節目を迎えたことは慶賀に堪えない。

さて、滋賀県の地勢は琵琶湖が県土の6分の1を占め、森林が2分の1を占める。国境を東西南北緑豊かな山々が取り囲み、そこに水源を発し、殆んどの河川は扇状地を形成して河口を琵琶湖に開く。古来、山岳原始信仰発生以来、仏教が公伝すると歴史遺産としても神仏習合、本地(仏)垂迹(神)説により近江は「神仏います国」へと歩みを進めることになる。

現在、東京、京都、奈良に次いで国指定重要文化財の保有県である。それも仏教美術・神道美術が多いのが特徴である。それが近江文化遺産の特色でもあり、水の文化遺産の多いのも地勢によることと文化の特色による。

一方、歴史的に見ると経済人は近江商人が目立つ。「三方よし」とか家訓に「神仏のことは常に忘れざる様にいたすべし。」とある通り、利他・信仰が大切な心情となっている。

文化・経済フォーラム滋賀が今後取り組む課題は、湖国近江の歴史遺産が文化人、経済人いずれにも大きな影響を与えてきた共通の近江文化の特色を生かして交流を保ち、独自の新しい滋賀の文化を築き発展させる必要があると考えられる。

国の第1号に選定された「近江八幡の水郷」を始め現在7ヶ所が「重要文化的景観」に選定されている。いわゆる地域としての重要文化財であり、日本遺産「琵琶湖とその水辺景観―祈りと暮らしの水遺産―」共々、これからの新しい滋賀の文化創造の要素であろう。

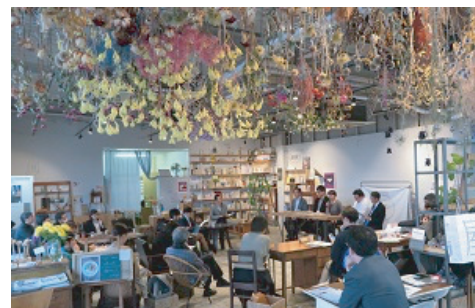
「文化・経済フォーラム滋賀」の存在は重い。



設立総会で挨拶する木村代表幹事(当時)



「文化で滋賀を元気に!賞」受賞者と記念撮影する石丸代表幹事(当時)



文化ビジネス塾の様子

第 13 回文化ビジネス塾／びわ湖芸術文化財団地域創造部と共催

8 月 29 日 (土)・山中 suplex (大津市山中町)

アートを地域のプラットフォームに

ゲスト 山中 suplex (石黒健一さん、小笠原周さん、小宮太郎さん、堤 拓也さん)
聞き手 小吹隆文さん (美術ライター)、コーディネーター 藤原昌樹さん (企画推進員)

コロナ禍で芸術文化分野でも活動自粛に直面しましたが、若手アーティストを囲み、今後の活動に向けて意見交換しました。

プラットフォームとは何か

小吹 私的に解釈すると、様々な立場の人が集まって、そこから色々な輪が広がって行くような場所のような意味合いかと思っていて、「アートを地域のプラットフォームに」というテーマが上がるということは、現状そういうプラットフォームがないということかと考えています。

山中 S 単純にアーティストの発表の場は滋賀にないと思います。基本的に地元の作家をフィーチャーした企画は京都に比べると圧倒的にない。これは滋賀だけの状況ではないと思いますが。

小吹 滋賀はアーティストがたくさん住んでいるエリアの割には、利用する場所であったり、スタジオ的なものは少ない。消費がされない。そこで、県民の方や企業の方と接点がありませんということですね。

山中 S そもそもアーティスト同士もつながれていない感じです。

小吹 インターネット上でそういう広場みたいな場所を設けて行くのも 1 つのプラットフォームかもしれないですね。それはオーガナイズする人がいないと難しいですか？

山中 S あればいいなと普通に思います。

会場 私たちはセンターを求めがちだけど、つながりをうまくすれば面白いものも生まれる可能性がある。ネットワークを作るに

してもそれぞれの拠点で面白いことがないとなつてつながりようがない。また、誰かが大きな声でつながろうと言わないとできないもので、それがなければこのような企画が生まれるのです。結節点のきっかけを作ることができればというのが、文化・経済フォーラムの発想だと思います。



だれとどのようにつながりたいのか

山中 S 美術館やギャラリーで展示することだけがアーティストの役割でないと思っています。地元の人たちに展覧会やイベントに見に来てもらって交流することも結構大切で、例えば僕らが山中町にもっと介入していったら、文化として何か成立するものが生まれるかもしれない。お祭りの神輿を直すみたいなことでも何でもいい。アーティストが土地に住み馴染んで行くことが大きな意味があると思っています。逆に言うと、同じ考え方をを持った人が分散して同じものを目指してしまうと、地域のローカルな面白さがなくなっちゃう。それぞれが地域とつながり、さらに地域を超えてアーティスト同士、若い人同士がつながっていることが重要かと。僕らから紹介できる人たちもいっぱいいるし、まだ滋賀で掘り下げられていないところ、それはスペースかもしれないし、企業さんかもしれないけれど、知り得ないことはまだまだあるので、今後ともこういったイベントがあれば参加してつながる機会が増えたらと思います。

文化経済サロン／滋賀県公立文化施設協議会共催「トップセミナー」を開催

10 月 21 日 (水)・びわ湖ホール小ホール

文化芸術と地域の活性化 ー共生社会の実現に向けてー

講師 ウスビ・サコさん (京都精華大学学長)

講師はマリ共和国のご出身で、京都大学大学院で建築学を修め、2018 年から京都精華大学の学長を務められているウスビ・サコ氏です。コロナと生きる地域社会、グローバル社会の中で多様な価値観を認め合う社会のあり方についてお話を伺いました。

グローバル社会の多様性をどう考えるか

日本は他の先進国などと比べると感染者数、死亡者数もそこまでではないが、本当に社会生活が苦しくなっている部分がある。不用意にくしゃみもできないくらいだ。マリはこれまでも様々な感染症に苦しんできているので、コロナも特別なことではない。感染した人に対する優しさ、心遣いというのが全然違う。感染した人を排除するように社会が分断されダメージを受けるということは、もともと持っている社会基盤が弱いのかかもしれない。

2050 年の頃までに、日本は人口が減ると同時に高齢化率が 40% 近くになるとされる。アフリカのように 30 年後も生産年齢人口が多いと予測される国々から、一定の労働力が日本に流入することは目に見える。日本が外国人労働者をどのように取り入れて社会を支えていくか。ドイツでよく言われたのが「労働力が欲しかったけど人がついてきた」という言葉。多様な文化や思想を持っている人たちが増えるとき、日本の社会のあり方をどう見ていくかである。

グローバル化とは、人・モノ・カネ、情報が国境を越えて自由に行き来し、その価値は一国の判断で決められないこと。グローバル時代には、入る側も受け入れる側も互いに歩み寄り姿勢が必要だ。そして、多様性をどう考えるかが大きなポイントとなってくる。多様性とは人種、性別、宗教的思考、社会・経済的背景、民族性全てを超えた人間と人間の関係。文化圏の単位で定義する多文化共生と混同されがちだが、人がある文化を代表するのではなく、一人ひとりがたくさんいることを認めなくてはならない。留学生はすでに多様化していて、私が出会った中国人学生はハンガリーで生まれイタリアで育ち、今日本で学んでいる。



多様性を認める社会では、ステレオタイプで判断したり、意見を言わないのが美德とする日本人特有のコミュニケーションは危険だ。私は毎日、学生に自分はどうか聞いている。自分を語ることで対話が成り立ち、自分自身が見えてくるものだと思っている。オランダの学者が「文化は構成員によって新しい文化に変容することができる、つまり学習によって作られるものだ」と言ったが、これから多く流入してくる外国人と対話し、どう文化を築いていくかが日本にとって重要だろう。

文化で滋賀を元気に！シンポジウム／文化産業交流会館共催「ビジネスカフェ」を開催

10 月 18 日（日）・文化産業交流会館小劇場

アートよし／地元よし／未来よし 新・三方よしのつくり方

【基調講演】 神山町はなにを投資したのか？

講師 大南 信也 さん（NPO 法人グリーンバレー理事）

クリエイティブ人材を集め、人口の数より中身を変えていく

1979 年 10 月、私は 2 年間暮らしたカリフォルニアのシリコンバレーから神山に帰ってきます。かつてのシリコンバレーがそうであったように、神山は過疎が進む何もない場所だけれども、クリエイティブな人たちが集まれば新しいことが起こるのではないかというイメージを持っていました。目指したのは、人口減少を受け入れた上で、人口の中身を変えていく「創造的過疎」です。2015 年の国勢調査で神山町の人口は 5300 人、60 年前の 4 分の 1 まで激減しています。でも、今の神山は、何か可能性を感じさせる状況にあります。例えば、東京に本社を置く IT ベンチャーなど十数社が立地しています。そして現在、集まった企業家らが中心になって、テック人材を神山から輩出していこうと「神山高等」を設置する計画が進んでいます。未来への投資です。

文化が経済を育む～地域づくりとはなにか

スタートは国際交流です。1991 年、母校の小学校に残されていた友好親善人形を 63 年ぶりにアメリカへ里帰りさせました。1997 年、転機が訪れます。徳島県が総合計画を発表し、神山を中心とする地域に徳島国際文化村を作るという情報が入ってきます。せっかくなら住民が望む国際文化村を提案しようと民間で実行委員会を作ります。委員会では「文化が経済を育む」を基本理念に、色々なプロジェクトが果立って行きました。後にそれらを統括運営するために誕生したのがグリーンバレーです。人形の里帰りの成功体験を共有した 4 名が、中心メンバーとなりました。まず国際芸術村を作ろうと、アーティスト 3 名を毎年 2～3 か月招待し、制作活動を住民が支援する事業を始めます。神山に大きな変化をもたらしたのは、このアート事業です。町に作品が残るとともに、アーティストの移住が始まり

ます。そして友だちを神山につないで行き、事業を興して行きます。アートによるまちづくりは日本全国で大流行していますが、神山は観光客でなく、芸術家自身をターゲットに置きました。滞在アーティストの満足度を上げるのです。5、6 年続ける中で、町内全域に光ファイバー網も施設され、増える移住需要に応えるために空き家改修事業を始め、結果的にこれが場所を選ばない企業にオフィスを置いてもらう「サテライトオフィス」につながります。人の流れはサービス業を生み、農産物の需要ができ農業を育む。地域内で経済が回り始めました。

文化芸術はわかりにくい。1999 年にプロジェクトを始めた時は、結構冷めた目で見られていました。しかし、アートの事業を始めて新しいライフスタイル、ワークスタイルが生まれて、知識、情報、技術を持った人たちが集まってきました。そして、彼らが今、神山の変化を主導しているのです。

アーティストが町に残した作品の一つを紹介します。「隠された図書館 Hidden Library」です。借りるのではなく預ける図書館。人生に影響を受けた本を一生の間に 3 冊だけ寄付できます。本を納めると 1 個の鍵がもらえ、鍵を持った人だけが利用可能です。少しずつ本が並び始めています。仮に図書館が本でいっぱいになるのに 50 年かかるとします。私は今 67 歳。本でいっぱいになった図書館を見ることができません。地域づくりというのは、こういうことだと思います。誰もが結果を早く見たがるけれど、次の世代まで時間軸を長く取ることによって奥行き、広がりのあるものができあがる。地域づくりを体現するような図書館です。

最後に、「すきな滋賀」を「すてきな滋賀」に変えるのは簡単なことです。「て（手）」を加えること、まず行動することです。

【パネルディスカッション】

新・三方よしのつくり方 ―投資とリターン―

パネリスト 大南 信也 さん（NPO 法人グリーンバレー理事）
松井ライディ 貴子さん（Biwako Backroads 代表）
竹内 清臣 さん（東近江市職員）
司会進行 山下 里加 さん（京都芸術大学教授）

なぜアートなのか？

大南 自分たちがワクワクするような町にしたいと思いがありました。そして自分たちの手の届くところに何があるかです。

山下 施設でなくてアートをやる人間だったのですね。その影響は。

大南 一番は地域の寛容性。外国人が来るだけでもハードルが高い田舎。現代アートのアーティストを受け入れることが、結果的にオープンな地域を作ったと思います。

担い手をどう育てるのか？

松井 自分のツアーのガイドはボランティアでなく基本は有償。責任を持って良いものを提供する意識がないといけな。将来的に米原の人たちの仕事になってくれたらいいと思います。

竹内 団体を支援してきて、担い手は“人手”ではないと感じています。未来と一緒に作ってくれる人を増やしていきたいです。



左から松井さん、大南さん、山下さん、竹内さん



来場とオンライン（web 視聴）での同時参加によるハイブリッド型で実施しました。

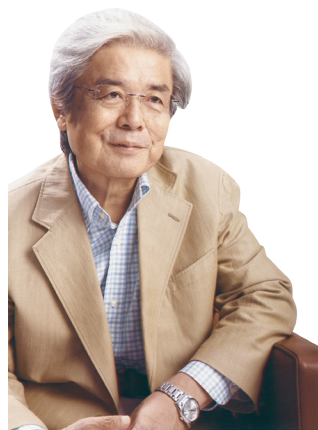
大南 自分たちが残したものを、次の世代が価値がないと思ったら担い手は現れない。アート事業を始めたとき、皆んな役に立たないと言うんです、今を基準にしてね。これだけ世の中が予測できない時代になって、今、役に立つことばかりやっても上手くいかない。閉じずに開いた状態で考えた方がいい。10 年、20 年の計画を立てたって、コロナも予測できない。問題はやっぱり人が解決していくので人を意識的に集めたり、育てていくのが大事だと思います。

現代で「三方よし」を応用すると

山下 「世間よし」の視点をどれだけ広く、時間軸で遠くに置くかというところで、皆さんの中に新しい「三方よし」が生まれて来るのではないかと思います。ありがとうございました。

松井さんには米原で始めたインバウンドツアー事業について、竹内さんには芸術家の工房が集まるヘムスロイド村についてご紹介いただきました。

文化・経済フォーラム滋賀発足10周年記念



コロナ新時代 元気が出るのう (脳)

養老孟司氏 (東京大学名誉教授) 講演会

解剖学者として、また大ベストセラー『バカの壁』の著書などで社会を論じてきた養老孟司氏に、新型コロナウイルス感染症の影響で社会に閉塞感が増すなか、希望と元気を見出す考え方、生き方のヒントをお話しいただきます。

びわ湖ホール声楽アンサンブル公演

ソプラノ 飯嶋幸子、黒田恵美
メゾソプラノ 小林久美子、森季子
テノール 島影聖人、古屋彰久
バス・バリトン 津國直樹、林隆史 ピアノ 植松さやか



厳しいオーディションを経て選ばれた声楽家により構成される日本初の公共ホール専属声楽アンサンブルの公演です。ゆっくりお楽しみください。

令和3年 (2021年)

2月13日 (土) 14時開演 (13時開場)

会場 びわ湖ホール大ホール

入場無料

指定席になります。期日までのお申し込みが必要です。
お申込み方法はウェブサイト、チラシをご覧ください。

申込締切

会員 1月17日 (日)

一般 1月25日 (月)

会員の皆様は1月17日 (日) までにお申し込み
いただきますと、優先してお席を確保いたします。

プログラム

14:00~14:30 びわ湖ホール声楽アンサンブル公演

14:50~16:00 養老孟司氏講演会

16:15~16:40 「2020文化で滋賀を元気に！賞」表彰式
「文化で滋賀を元気に！」する提言発表

当日は、会場で提言をイメージした下記イベントを開催します。

びわ湖・アーティスト・みんぐる BIWAKO ARTISTS MINGLE

若手アーティストの作品展示と情報交流

正午~18:00 / びわ湖ホール大ホールホワイエ

第11回総会を行います

日時：令和3年 (2021年) 2月13日 (土)

13:00~13:30

会場：びわ湖ホール 3F 研修室

議事

- ・令和2年度事業報告及び収支決算
- ・令和3年度事業計画及び収支予算
- ・役員の改選

令和3年度会員継続のお願い

文化・経済フォーラム滋賀は、「文化で滋賀を元気に！」を合言葉に2011年に発足以来、会員の皆さまのアイデアとネットワークを活かして滋賀の未来を考える事業に取り組んでいます。活動は、皆さまの会費で運営されています。1月は会員継続手続きの月です。ご案内を郵送させていただいておりますので、令和3年度におかれましても、ぜひとも引き続き会員をご継続いただき、「文化で滋賀を元気に！」する活動にご参画いただきますようお願い申し上げます。

年会費

個人・文化団体会員 一口 5,000円

法人会員 一口 20,000円

文化・経済フォーラム滋賀 第1回~第11回総会・講演会の記録、提言

<年>	<総会・参加人数>	<講演会 講師・参加人数>
H23(2011)	1回 163人	鷲田 清一 大阪大学総長 163人
H24(2012)	2回 147人	大原謙一郎 大原美術館理事長 147人
H25(2013)	3回 112人	養 豊 兵庫県立美術館長 230人
H26(2014)	4回 82人	田村 孝子 グランシップ館長 107人
H27(2015)	5回 88人	姫野カオルコ 150回直木賞作家 307人
H28(2016)	6回 98人	山極 壽一 京都大学総長 253人
H29(2017)	7回 79人	津田 和明 サントリー元副社長 113人
H30(2018)	8回 86人	小林 徹 オプテックス会長 117人
R1(2019)	9回 56人	北川フラム アートディレクター 123人
R2(2020)	10回 52人	澤田 康彦 前「暮らしの手帖」編集長 177人
R3(2021)	11回 人	養老 孟司 東京大学名誉教授 人

*敬称略、役職当時

<提言タイトル>

H24(2012)	文化ビジネスの開発で滋賀の文化と経済に新展開を
H25(2013)	文化・芸術・ビジネスの見本市としての国民文化祭へ
H26(2014)	滋賀の文化を発信する国民文化祭を早期に、 スポーツイベントと連携した開催へ
H27(2015)	自然・歴史・暮らしが統合された地「近江」の発信を ～「近江遺産」「近江八百八景」から日本遺産そして世界遺産へ～
H28(2016)	新生美術館計画の実現と滋賀の魅力の発見・発信へ
H29(2017)	世界遺産、無形文化遺産、世界農業遺産の登録等への取り組みを ～地域の文化遺産を見直し、グローバルな評価へ～
H30(2018)	地域文化を育む、新たな観光を創造する
R1(2019)	アーティストと地域をつなぎ、新たな文化を育む
R2(2020)	文化で滋賀を元気に！多様な人材を育む地域活動の推進